

第 64 話〈牧然報告記〉の要旨と参考資料

第 64 話〈牧然報告記〉の要旨

土呂久の亜ヒ酸鉱山周辺で死んだ牛をめぐって、農民を救うために動いた岩戸村、鉱業を優先した国、村と国の間で原因究明に消極的だった宮崎県。三者の姿勢の違いが浮き彫りになる中で、池田牧然獣医は、鉱山周辺で起きた異常な事実を知らせるためにルポを書きました。

第 64 話〈牧然報告記〉の参考資料

64-1 池田牧然獣医の報告記「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉱山ヲ見テ」

大正十四年四月十二日

岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉱山ヲ見テ

三田井 池田牧然

土呂久放牧場

岩戸村大字岩戸字土呂久、標高一六四四米古祖母山ノ中腹ニ有リ。東北ハ大字山裏ニ、西ハ上野村ニ境シ、西南ハ大字岩戸一帯ニ面スル高台デアル。

旧藩時代岩戸庄ノ牛馬ヲ混牧シタガ、明治初年頃カラ牛ノ放牧ニ改メ、壯幼牛ヲ毎年百余頭宛放牧シタモノデアル。然ルニ明治中年頃、土呂久部落有放牧場トシテ、其ノ面積約二百町歩ノ主要ナル区域ニ土柵ヲ、森林界ニ木柵ヲ繞ラシ、少々完備シタ放牧場トナシ、七折、高千穂、上野方面ノ畜牛ヲモ収容スル事ニシタガ、其成績ガ誠ニ良好デ、五月初旬ニ入場セシメテ十月下旬ニ退場セシムル時ハ、殆ンド入場当時ノ影ヲ止メヌ位良ク成長肥満シテ、一般畜主ノ満足ヲ得タモノデアルガ、同地方ハ一般ニ鉱山地帯デ、偶々鉱山師トナリ一攫千金ヲ夢見ルモノガアルヤラデ、一時鉱山熱ノ為ニ畜産熱ヲ冷却セシメ、家畜ノ数ヲ次第ニ減ジ、大正二、三年頃カラ放牧休止ノ止ムヲ得ナイ事ニ立チ至ツタノデ、現在モ休場シテ居ル。其レヲ今回、二、三有志者ノ希望デ、再ビ開設シ様ト目下計画中ノモノデアル。何レ本年カラ再興ノ運ビニナロウト思フ。

土呂久ハ四、五年前迄ハ農家ノミデアツタガ、今ハ鉱山業ガ三、四軒アル。兎ニ角、明治三十年頃カラ大正元年頃迄デ、西臼杵郡ノ土呂久馬（外録馬）ト云ヘバ大シタ声望ノ有ツタモノデ、實際ニ良馬ガ居タ。其レハ土呂久ノ先覚者ガ「アラブ雑種」ノ種牡馬桔梗野号ヲ郡ヨリ貰ヒ受ケ、之デ一般馬匹ノ体型ヲ整理シ、其レニ明治四十年頃「トロツター雑種」ノ種牡馬ヲ入レ、幅員アル短肢小格ノ馬ヲ作ル事ニ努メタカラデアル。ソレデ県内外ノ商人ハ、土呂久馬ハ強クテ後デ体格ガ出来テ使役一等ト評判シタモノデアル。然ルニ其ノ後、馬匹改良方針ナド理屈ヲ云フ時代ニナツテ、馬ノ体型ガ一変シタ。即チ、理屈ガ当業者ヲ迷ハセタ訳デアル。偉大ナ体格ノ馬ト交換シタリ、又、薄平ナ馬

ヲ買込ンダリシテ、次第次第ニ土呂久馬ノ名聲モ何処ニ納マツタカ判ラヌ様ニナツタ。又、其ノ原因ニ今一ツアル。其レハ、今迄ノ産馬家ガ明治四十二年頃カラ牛ニ乗り代ヘタモノガ過半出来タカラデアル。

土呂久ハ一帶ニ草ガ豊富デアルカラ、明治三十四、五年頃ハ戸数三十三戸ニ対シ、馬ガ八十五、六頭、牛ガ六十二、三頭モ居タノガ、今ハ戸数四十四戸ニ対シ、馬ガ僅カニ三十二頭、牛ガ五十五頭ニ減ツタ。乍而事實ニ於テ、牛ハ減ツテ居ナイ。寧ロ増加ニ努メテ居ル。

近来亜硫酸鉍ガ開山シテ斃牛馬ガ多イ為メニ、牛ハ他部落ニ転地セシメタリ、預托シテ居ルモノガ、恐ラクー、二十頭アルト云フ事デアル。其レカラ見テ、確ニ馬ハ牛ニ代ツテ居ル。其ノ動機ハ明治四十二、三年頃、全国的ニ流行シタブラウンスウキス種牝牛ガ村有ニ来テカラ、岩戸ノ牛ガ突飛ニ高く売レタノデ、誰モ彼モ管理ノ仕良イ牛ニ乗り代ヘタノデアルガ、馬ヲ压倒スル位カラ入レタ結果、牛ハ現在中々立派ナノガ居ル。毎年ノ生産犢ハ立派デ品評会デモ優勝シ、糶市ノ価格モ郡ノ一位ヲ占ムルモノガ多イ。候補種牝牛ヤ候補種牝牛ハ、大概此部落生産ノモノカ、又ハ、其系統ニ連ルモノガ多イト云テモ宜イ位デアル。

何様土呂久ハ、畜産ノ歴史モ古イガ、畜産地ト指ヲ屈シテモ辱カシカラザルモノデアル。

土呂久ノ蜜蜂及椎茸製造

地勢ノ関係等良イノデアラウ。在来種ノ蜜蜂ガ良ク巢ニ入ルノデ、各戸蜜蜂ヲ養ナツテ居ナイモノハ殆ンド居ナイ。多ク持ツテ居ルモノハ、百箱以上モ持ツテ居テ、部落デ蜜ノ総生産高ハ実ニ大シタ者。其量ハ判然セヌガ、一ケ年ノ蜜代デ煎子、鯉節、砂糖、油代ハ充分ニアツタト云フテ居ル。

椎茸ハ同部落ノ主要物産デ、先ヅ椎茸ノ生産高デ、納税其他農家ニ必要ノ経費ハ、之デ支払ツテ居ルト云フテモ良イ位ダト云ツテ居ル。其ンナ訳デ、牛馬ノ売上代トカ農産品ノ売上金ハ貯ヘトナツタラシイ。其レデ、同部落ハ一般ニ暮シ向ガ良イ。同部落一般状態ハ、以上述ベタ通りデアルガ、茲ニ部落民ノ為メ、実ニ同情スベキ悲惨ナ問題ガ現在起ツテ居ルノデアル。即ニ、三年前ヨリ、或原因ノ為メニ農作物ノ不作、特ニ今迄デ特産デアル豆類全クノ不作、植林ノ枯死、椎茸ノ無発生、蜜蜂ノ全滅、同一類似症状ノ牛馬ノ斃死、野生鳥類ノ死亡等デアル。其レニハ種々ノ原因ガアリマシヨウガ、茲ニ見聞シタ事ヲ書キマシテ、諸賢ノ御教示ヲ受ケ度イト思ヒマス。

亜硫酸鉍ヲ見テ

吾輩ノ見タ同鉍ハ、小字惣見ノ下部落、土呂久ノ中央部ヲ貫流スル川側ニアル。同山ハ大正九年六月ノ開山デ、鉍業所ハ奥行三間位デ、長サ十五、六間モアロウ。其間ニ、簡單ナ石垣デ造ツタ二間四方位ノ砒石ヲ焼ク釜ガ五ツ六ツニ、精鍊釜ガ五ツ六ツアル。其ノ釜ノ中央部ニ、一尺四方位デ、高サ三間位ノ煙突ガ二本見ユル。茲ニ初メテ行ツタ吾々

ノ鼻ニハ、一種云ヒ得ヌ峻烈ナル臭氣ガ鼻腔ヲ突キ、目ヤ咽喉ヲ極端ニ刺戟シタ。此処ニ働ク工夫工女連中ハ、覆面シテロニハマスクヲ掛ケテ居ル。

二、三ノ釜ニハ、拳大ニ丸メタ砒石ノ鉍石ガ入レテ、薪ニ炎ヲ付ケテ、亜砒酸ヲ製造シテ居タ。二ツノ釜ハ、今火ヲ消シテ、亜砒酸ヲ採取シテ居タ。此ノ亜砒酸ノ鉍石ハ、地下ヨリ掘リ取ルノデアルガ、亜砒酸ハ鉍石ノ焼クル煙ノ中ニ含マツテ、其レガ釜内デ凝結シテ採レルト云フ事ダガ、実ニ多量ニ含有シテ居ルモノラシイ。斯レナ設備ト彼レナ方法デ採ツタモノヲ、大阪辺デ精製サルレバ、貴重ナル藥品トカ染料、又ハ印刷用肉ノ原料ニナルカト、実ニ結構ナ事業デアル。

乍而、吾々ハ此亜砒酸ハ毒薬デアル事ヲ承知シテ居ルガ、其ノ焼殻ヲ、水清キ土呂久川ニ遠慮モナク投ゲ込ムノヲ見テ、不思議ニ思フタ。是等ノモノニ対シテハ、河川港湾取締規則ハ適要セザルモノナルヤト思ヒマシタ。

亜砒酸鉍附近ニテ見聞シタ事ニ就テ

岩戸村土呂久ト云ヘバ、其ノ差ロガ天ノ岩戸神社ヲ去ルー里半、其レカラ奥半里モ人家ガ点在シテ居ル、土呂久川ノ兩岸ニ沿フ稍々大部落デアル。土呂久ヲ別ツテ折原、畑中、惣見ノ三小部落ト為ス。差ロガ折原、畑中デ此兩部落ト惣見部落ハ小山ヲ以テ境シテ居ル。山ノ北面ニ行クト、直感的ニ火事跡ノ様ナ一種悲惨ノ感ニ打タルノ其レハ、二、三十年モ経過シタ植林ノ杉ガ萎縮シテ成長ガ止リ、或ハ枯死シテ赤葉味、又竹林ハ殆ンド枯死シ、雑木モ立枯レテ、如何ニモ寂莫ノ感ガアル。耕地ノ荒廢シタモノ有ツテ作ノ付ケ様モナイ云フ様ナ有様ニ見ヘル。数年前富誇ツタ部落ガ、今ハ何トナク油氣ノナイ部落ト化シタ様ナ感ガスル。山川ノ水ハ清ク澄ミ渡ツテ居ルガ、川中ノ石ハ赤色ニ汚レテ、三年前迄居タ魚類ハ、今ハ一尾モ見ヘヌ。

今ハ椎茸ノ發生デ忙シカラネバナラヌノニ、何ノ果報カ此地ノ重要物産デアル椎茸ノ原木ヲ見レバ、茸一ツ見ヘヌ。土呂久名物ノ蜜蜂モ、今ハ穴巢ヲ止ムルノミ。村人ハ、椎茸ハ二、三年一芽モ出ナイ、蜜蜂モ三年前カラ漸次死滅シテ終ツタ、偶々花ニ狂フ蜂ヲ見テ居ルト、花ヲ吸イツツ死スルモノガ多イ、又小鳥類ガ畑ノ中ニ死ンデ落チテ居ル事ハ年中ノ事デ、何時デモ死ンダ小鳥ヲ畑ノ中ヨリ拾ツテ見セル事ガ出来ルト云フテ居ル。鉍山ニ出稼スル家ヲ訪フテ見ルト、妙齡ノ婦女ノ声ハ塩枯声デ、顔色如何ニモ蒼白デアアル。久敷出稼デ居ル人ノ顔面ハ、恰モ天刑病（*1）患者ノ様ニ浮腫糜爛、眼モ異様ニ充血シテ居ル。果シテ人ノ嫌フ天刑病カ。予ハ決シテ其レト信ズルモノニ非ズ。犬ニハ異常ヲ認メザルモ、猫ハ確ニ栄養不良デアアル。其原因果シテ何物ナルカ。其附近ノ牛ガ病氣ト云フ話デアルカラ、其ノ牛ヲ診断シテ見ルニ、營養不良、元氣無ク、歩行漫跚、皮毛光沢ヲ失シ、食欲不振、体温ハ平温、脈膊ハ弱イガ、呼吸器等異常ヲ認メズ。胃腸ノ蠕動ガ微弱デアアル。時々、流涎泡ヲ吹き、全身戦慄スル事ガアル。診断シタノハ僅カニ二頭デアアルガ、共ニ同一症状デ、病名ヲ付ケ兼ネル。昨年ノ秋、村長ノ依頼デ土呂久部落ノ病牛馬診断ヲ行ツタ高千穂警察署ノ衛生技手、郡畜産組合技術員ノ話ヲ聞イテモ、

罹病牛馬十頭デ、其症状全部同一デ、全身点々脱毛シテ居タガ、矢張り病名ヲ付ケ得ナイト云ツテ居ル。

茲兩三年間ニ同症状ノ牛馬ガ十六頭、昨秋転地セシメタモノガ十頭、斃死シタノガ、去ル七日郡畜産組合技手ガ警察官立会ノ下ニ死体剖檢ニ因ツテ、鑑定材料ヲ岩戸村長カラ宮崎県警察部ヘ差出シテ置タ、彼ノ斃牛ヲ加ヘテ六頭デアツテ、現在罹病シテ居ル牛馬ガ四頭、転地療養中ノ牛ガ二頭居ルト云フ事デアル。転地セシムレバ、先ヅ營養、元氣共ニ、二、三ヶ月デ快復スルト云フ事デアル。

茲ニ好一例ヲ記セバ、亜硫酸鉍附近ノ一牝牛ヲ同所ヨリ約一里位ノ立宿部落ニ昨秋転地療養セシメタルニ、二、三ヶ月ニシテ快復シタカラ、厩肥生産ノ關係カラ本春引歸リタルニ、如何シテモ採食セヌノデ畜主ハ大變心配シテ、獣医ノ診断治療ヲ受ケタレド一向ニ効果ガナイ。其処ニ同家ヲ去ル約十四、五町位下部落（未ダ被害ナキ部落）カラ牛ノ飼糧ヲ持ツテ、茅^{カヤウ}駄セニ来タモノガアル。其ノ飼糧ヲ引歸ツタ牛ニ与フレバ、元氣良ク採食シター方ニ於テ、同家デ作ツタ飼料ヲ他ヨリ来タ牛ニ与フレバ、之ハ決シテ食セナカツタノデアル。此一例ニ就テモ、予ハ質疑ヲ生ゼザルヲ得ナイノデアリマス。

其他變ツタ事モアルガ、以上ノ狀況ニヨリ觀察スルニ、亜硫酸鉍開山ノ為メ、其ノ附近農家ニ決シテ被害ガナイト云ハレマイト思フ。寧ロ有リト判断シテ誤ラザルモノト存ジマス。

兎ニ角、亜硫酸製造ニヨリ生ズル処ノ煙ハ、重ヒニ違イ無イ。又、製造サレタ亜硫酸モ重ヒニ違ヒナイ。農作物、林産物ノ不作枯死ガ、川ニ添フテ甚敷処ヲ觀テ明ラカデアル。乍而、亜硫酸及其煙ガ重ヒカラ、鉍山ヨリ上ニ被害ヲ及バサナイトハ言ハレマイ。其レハ、鉍山ヨリ数十尺高イ処ノ竹林ヤ山林内ニ影響ヲ及ボシテ居ルノガ見ヘルカラデアル。被害ノ模様ガ恰モ煙ノ如ク、鉍山ノ附近ガ濃厚デ、遠ザカルニ從ヒ薄クナツテ居ル

昨年、或技術者ガ同地デ、亜硫酸ハ人畜ニハ被害ヲ及ボスモノデナイト云ツタ事ヤ、亜硫酸ハ風ニ吹カレテ撒布スルモノデナイカラ、亜硫酸ノ直接被害ハナイト云ハレタ事ヲ閃聞シタ。果シテ事実デアルカ。若シモ地位アリ学識アル人ガ其ノ事ヲ云ハレタトスレバ、意外ニ驚カザルヲ得ンノデアリマス。又、或新聞ニハ、先日、同部落民ガ被害ニ対スル救済ヲ叫ブハ、裏面ニ煽動者アルニ非ラザルカトカ、又、去ル九日頃、岩戸村長ガ警察部ヘ持ツテ行ツタ斃牛ノ鑑定材料ニハ、故意ニ亜硫酸含有物ヲ入レテ有リハセヌカト云フ意味ト、結核病デハ無イカト云フ如キ事ガ掲ゲラレテ有ツタ。而モ警官立会ノ下ニ死体ヲ剖檢シ、又材料ヲ瓶詰ニシタノデ、ヨモヤ其ノ事ハ有リ得ベキモノデナカラウト思フ。如之新聞ノ材料ガ何処カラ出タノカ、寧ロ疑ヒヲ挿マザルヲ得ナイト思ハレマス。吾々ハ、如斯疑心ヲ挿マズシテ農林畜凡ベテノ点ヲ实地ニ就キ調査ヲ行ヒ、質疑ノ点ヲ発見セバ充分ノ調査ヲ遂ゲ、亜硫酸鉍ニ因リ確ニ被害アリト決定セバ、同鉍山ノ設備ヲ完全ナラシメ、或ハ其筋ノ命ニ依リ改善セシメ、被害ヲ軽減セシムルカ、他ニ農民ノ救済法ヲ講ジ、農村振興上最善ノ策ヲ施シ、順朴ナル部落民ノ愁眉ヲ開カシメン事ヲ望ムノミ。

尚ホ同地ニハ、明治二十三年設立セル和合会ナル私会アリ。同会ト同亜砒酸鉍経営者ト鉍業上ニ関シ契約アリ。其契約書ハ、十二ヶ条ニ亘ツテ居ルガ、内容ニ至ツテハ、資本家ガ順朴ナル農民ヲ如何ニ圧迫セルカヲ窺フニ足ルモノガアル。

該契約書内容ノ公開ハ其ノ時期ナラザルヲ憂ヒ、後日ニ譲ルコトトシテ去ル。

七日、西臼杵郡畜産組合技手鈴木日恵君ノ病体解剖鑑定書ヲ記シテ、諸賢ノ御指導ヲ仰ギ度ヒト思ヒマス。

注1 ハンセン病のこと。現在では、ハンセン病は感染力のきわめて弱い病気であり、アメリカで開発された薬で完治することが明らかになっています。この報告記が書かれた当時、不治の病のように思われて「天刑病」という言葉が使われていました。これは、誤った認識のもとで使われた言葉であり、廃棄すべき用語ですが、この報告記の史料としての価値を考えて、原文のままにしています。

64-2 日州新聞 大正14年6月3日夕刊

西臼杵岩戸の / 疑問の亜砒酸中毒 / 県でも徹底的調査する

去る4月6日、西臼杵郡岩戸村土呂久佐藤一蔵方の黒牡牛1頭が死んで以来、同地に於ける野村鉍業所のアヒサン工場が問題の中心となった。その当時死んだ牛は西臼杵の畜産技手が解剖したり尚県庁衛生課でも充分の調査をしたが衛生課の解剖の結果はアヒサン中毒ではないと云ってゐる。が畜産関係者の方では同地の牛や馬がすでに10数頭罹病し、これを転地療養さすればなほるが若し転地させぬとだんだん弱って死ぬる処から相当アヒサン鉍に関係があるものとして篠原技師も調査した。尚今度は蔵川畜産局長が来県したのを機に場合によっては本省から技師の派遣を乞ふ様になる様子である。中毒問題はかふしてまだ不明の^{うち}中にあるが同地方を調査したものの報告を見ると

アヒサン工場のある附近は従来盛に出来てゐた椎茸も蜜蜂もみんな出来なくなったり、死んでしまつて^お居り、牛馬は右様だと云つて^お居る。

果して事実とすれば大問題であるから県ではなを充分の調査をする様である。

(*63-7と重複)

64-3 池田牧然さんの人柄を追って

川原一之「斃牛」(鉍毒新書Ⅱ) P68~69より

視察報告記を繰り返して読むうちに、褪せることのない鉍毒告発の情熱に心打たれ、筆者の池田実さんがいったいどんな人だったのか、知りたくなった。

池田さんはすでに、この世の人でない。弟の池田^{はる}玄三が、郷里の高千穂町田原で養鶏を営んでいた。大正15年6月に郡畜産組合を辞めた実さんは、売薬業や運送業の経営も思わしくなく、単身満州に渡って蒙古種畜場長をしていたが、昭和12年11月に脳溢

血で死んだ、とのことだ。ぼくは「日記は残っていませんか」と尋ねた。玄さんは「兄の次女がもってるかもしれん」といった。

次女の池田^{いく}生さんは町の繁華街の片隅でつましく暮らしていた。ここにも日記類はなかったが、何通かの手紙と、形見の掛け軸を見せてもらった。

満州時代の掛け軸には、軽妙な筆さばきで、リズムカルに駈ける一頭の馬の墨絵が描いてある。伸びやかで自由奔放な馬の下に「牧童」のサインがあった。これが、池田実さんの晩年の雅号だった。「牧然」と「牧童」、畜産に打込んだ池田さんのおおらかな性格をしのばせる。

達者な筆運びの手紙は、筆者として池田牧然の名がある「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜硫酸鉍山ヲ見テ」の筆蹟と、全く違っていた。鉍山を激しく告発した、あの視察報告記は、どうも池田さんが書いたものではなさそうだ。いったい、だれが書いたのか。

改めて鈴木日恵さんをたずねた。穏やかな微笑みを浮かべて「これも、わたしの字です」といった。牛の解剖書を作成した二十歳の青年獣医が、視察報告書の筆者でもあった。同行した上司の名を使うのは、十分ありうることだ。それにしても、本名の「実」でなく「牧然」という雅号を用いたのはなぜだったのか。私的な性質の強い文書だったためではないか、と思われる。それをどんな形で発表したか、鈴木さんは記憶していない。